

出稼ぎバブルのグアテマラを訪ねて（フォト・エッセイ）

著者	小林 グレイ 愛子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	126
ページ	37-40
発行年	2006-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005527

出稼ぎバブルのグアテマラを訪ねて

写真・文
小林グレイ愛子
Aiko Kobayashi Gray



新しい家が建ち並ぶメキシコ国境に近い村（サン・マテオ・イシタタン村）

わたしとグアテマラとの関わりは、初めて訪れた一九八五年以来今日まで切れることは無かった。きっかけはマヤの末裔達が着ている素晴らしい手織りの民族衣装に魅せられたからだ。

三六年間続いた内戦も一九九六年に終わりその後の生活の変化は急激だ。米国企業の進出、携帯電話の普及、都市の至る所にみられるインターネットカフェ、ATMマシーンなど生活が便利になったと共に、物価の値上がりが市民の生活を厳しいものになっている。

今回、内戦中とはとても危険で訪れられなかった山あいの幾つかの村を、メキシコに近いグアテマラ第三の都市であるウエウエテナンゴを中心初めて回ってみた。

排気ガスであふれているウエウエは、一家に一台自家用車を持つ程のアメリカへの出稼ぎバブルのまったただ中だ。そして市民犯罪も増え、静かな住宅街でも店にはすべて強盗よけの鉄格子がはめてある。

まず、サン・ファン・アティタン村を訪れた。祭りと重なり民族衣装の男女が見事で美しい。ここは男性の衣装がまだ残っている珍しい村でもある。高地の強い陽射しの中、真っ青な空と衣装の赤、ピンク、紫で眼が痛くなるほどだ。

帰りのピックアップトラック（荷台につめるだけお客を乗せるミニバス）の運転手ペドロおじさんに彼の出稼ぎサクセスストーリーを聞かせてもらった。密入国を手引



米国のスクールバスの払い下げ（アルモロンガ）



サン・ファン・アティタン村の市（サン・ファン・アティタン村）



ピックアップトラックは市民のミニバス（スニル）



きしてくれる「コヨーテ」に一三〇〇ドル払い、フロリダ州まで入り、そして約一年間建築現場で働き一日一〇時間労働で一〇〇ドル稼いでいたと。今はトラック三台（一台はトヨタの新車）持っているけれど、またもうすぐアメリカに行くんだと自信満々で語ってくれた。医療費の高いアメリカで健康保険を持たずに生活するリスク、不法人国で捕まらないという条件の上での危険な稼ぎだ。

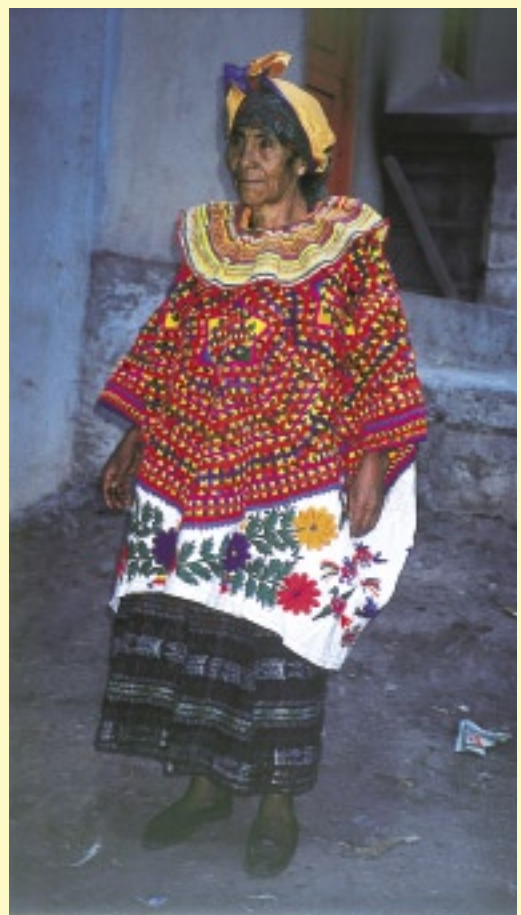
でも彼のような生き方が今男達の憧れの的なのだろう。サン・ファンの若い男達が持っていた手編みのバッグには、「2005 USA」の文字がくっきりと入っている。男性の仕事であるカギ針編みをしながら「今年こそアメリカに行くぞ」という気合が感じられる。

次に、強い原色の組み合わせの刺繍のウイピール（ブラウス）で有名な村サン・マテオの日曜市をめざした。メキシコ国境に近い標高二六〇〇メートルのその村にむかい五時間バスにゆられ着いたところは、山々に囲まれたグアテマラのチベットと言った趣きだ。そして驚くことにはこの偏狭の地に、豊かな村と言える程新しい家が次々とそびえ立っている。

そしてわたしのお目当ての民族衣装を着ている人は片手で数えられるだけのお年寄りしかない。しかもほとんどの女性達はグアテマラ中の他村のウイピールを着ている。パツン、テクパン、コバン、サンティ



自分のバッグを編んでいるサン・ファン・アティタンの男性（サン・ファン・アティタン村）



マヤの宇宙観を表したウィピールを着るマグダレーナおばあちゃん（サン・マテオ・イシタタン村）



「USA」と「2005」の文字が入った人気のバッグ（サン・ファン・アティタン村）

アゴ・アティトラン、サン・ルーカス・トリマンなどまるで織見本市のようだ。そして写真によると頭には大きなボンボンがついた手織りのひも飾りをつけているはずなのに、多くの女性は機械織りのプリントの花柄スカーフを巻いているではないか。グアテマラというよりはロシアの地方都市と錯覚しそうな国籍不明の雰囲気だ。

それを見た時、地の果てまで来たのになんははずではなかったという失望感と空気の薄さでめまいが起こった。

国民の半分以上が先住民と言われているこの国で、内戦中政府の取った政策は、村と村同士が手を結ばないよう、団結して人権など主張されないよう隣村と隔離させ交流させないやり方だった。

皮肉にも先住民を苦しめたその政策は、その村独特の民族衣装を存続させることにもなった。民族衣装を見れば出身地が、柄着方によつては未婚か既婚かもわかり、ゲリラでない証拠にもなる、といういわば身分証明書の役目であったのだ。

今自由にどここの場所にも行き来ができるようになり、村の伝統を守る必要も無くなった中、自分の好みで他民族の美しい衣装をお金で買えるようになったり民族衣装自体が無くなっていくことは、平和と豊かさの証である。

やがて、母親が娘の小学校行ききのユニフォームのためにと、簡単な棒織り機で織っている姿も見られなくなるだろう。日常生活



後帯ばたでウィピールを織るメルセーラ（サンタ・カタリーナ・パロボ）



アナと子供達。夕食に招かれて（サン・マテオ・イシタタン村）



他村（パツン）のウィピールを着たアンヘリーナ（サン・マテオ・イシタタン村）

活の中で女性が家族の健康と幸せを祈りながら一本一本緯糸を織り込む作業から、限られた職人が織る伝統工芸の世界になるのも近いのかもしれない。

この村を歩いて気付いたことは、女子供と野良犬ばかりで村人の数がやけに少ないことだ。やがて殆どの働き盛りの男達は北米に出稼ぎに行っていることが分かった。

興味深いことに村によって働く州が違っている。サン・マテオ村からはケンタッキーとテネシー、ガスパール村からはジョージアに、トドス・サントス村からはテキサスやカリフォルニアに、という具合に。マム語やテュフ語の言語の違う民族で固まるというよりは、もっと小さい単位の村毎というのがおもしろい。親戚や知人を頼ってということなのだろう。

わたしたちが泊まった小さなホテルは、御主人フアンが二回の出稼ぎで建てたもの。今お店を開くための準備金を稼ぎにまたアメリカに行っていると、生後六カ月の子を含めて五人の子持ちの奥さんアナは話してくれた。そしてフアンは、入国後一週間で不法入国で捕まり、ロスの留置所に入った後どこにいいのかわからないのだと。

内戦が終わって今、再び彼等は新しい時代の流れの中で翻弄されている。「民族の誇り、文化」どころではない別の戦いの中で。

（こばやしぐれい あいこ／タペストリ
作家）